

社会学者・東大名誉教授

見田宗介さんに聞く

今年、もっとも衝撃的だった事件は、6月、東京・秋葉原で起きた無差別殺傷事件ではないか。この事件が、日本社会のどんな変化を表しているのだろうか。戦後日本人の欲望や社会の変化を広い目でとらえてきた日本を代表する社会学者、見田宗介・東大名誉教授(71)に、読み解いてもらった。

(聞き手・編集委員・四ノ原恒憲)

リアリティーに飢える人々

後から見れば、今年が戦後日本に何回かあった大きな転換点の一つになっているのでは、と考えています。そんな時代の問題点を、秋葉原の事件が鋭く表しています。68年の永山則夫(当時19歳、以下N)による連続射殺事件があり、加藤智大被告(当時25歳、以下K)による今回の事件と同様、当時の日本を震撼させたものです。二つの事件には、共通する面が多いのにもかかわらず、核心部分が多岐にわたります。それが、戦後日本社会の空気が、すっかり入れ替わり、ある限界に達していることを示しているからです。

公益法人改革

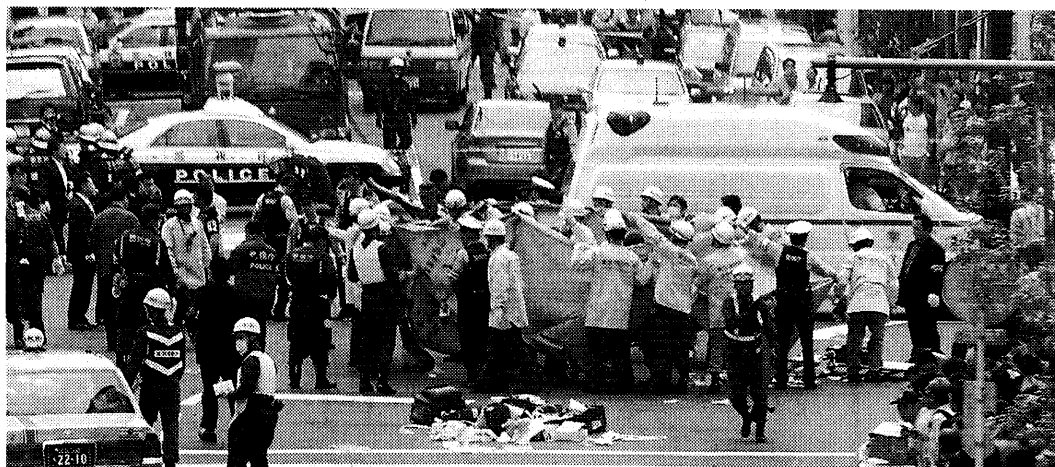
「民の力」が育つように

日本野球機構、NHK交響楽団、アムネスティ・インターナショナル、活動をやりにくくし、さらに天下りや本、駐車場整備推進機構。これらの団体を共通するのは何か。いずれも役所「益法人」も生んできた。財団法人のK法人もちらほらする。

チベットの問題

いまこそ対話の好機だ

チベットで揺れた年だった。3月の騒乱に始まり、五輪の聖火リレーを巡る混乱は世界に広がった。今月には、欧州連合(EU)議長国・フランスの重要性を改めてアピールする狙いがある。チベット人はチベット自治区以外に暮らす、チベット仏教を信仰するの



秋葉原殺傷事件(08年、写真) 6月、東京・秋葉原で、トラックではねられたりナイフで刺されたりして、17人が死傷、元派遣社員の加藤智大被告(当時25歳)が殺人罪などで逮捕、起訴された。加藤被告は携帯サイトに膨大な量の書き込みを残しており、派遣労働や若者のコミュニケーションの問題が議論になった。連続射殺事件(68年) 警備員ら4人が短銃で射殺され、当時19歳の永山則夫が逮捕された。犯行の原因を自身の貧困と無知に求めた手記「無知の涙」がベストセラーとなり、その後も獄中で小説を発表した。90年、死刑が確定、97年に執行された。

空気の「濃い」時代から「薄い」時代に

の夢は果たせず、犯行につながっていった。何か未来へのあこがれがあった、その可能性が遮断された瞬間に犯罪となる。Nは例外ではなく、70年代くらいまでの若者のほとんどは中身は様々ですが、今より素晴らしい未来があるというよりは、前提でした。Kの場合、東京へのあこがれは最初からもってない。「とりあえず安定した生活を」と、アルバイトや派遣社員で、国内を転々とした後、静岡で働いていて、人々の注目を集める場所として東京を選んだだけです。僕のゼミの学生の話です。聞いていても、夢や未来に対する想像力のスケールがどんどんしぼんで、現実的になっ

あしたを考える